



発行 埼玉高等学校教職員組合

〒330-0062

さいたま市浦和区仲町3-13-10

ヤギシタビル4F



NO. 694

教育復興に向けて支援の輪を広げよう！

TEL 048-823-4071

FAX 048-823-4072

Eメール saikojtu@maple.ocn.ne.jp

埼玉高教組をよろしくお願いします！

埼玉高等学校教職員組合中央執行委員長 羽田亮介

4月になり新しい年度が始まった。皆さんへの挨拶を兼ね埼玉の学校が抱える課題を組合の視点から見ていきたい。

働き方改革は「業務削減」

昨年度の確定交渉でも、県教委と確認したのは「引き続き、働き方改革は最優先事項」ということだが、皆さんの学校ではどうだろう？ コロナ以前と同じ規模で学校行事等を再開してはいないだろうか？ 退勤時間を打刻してから職員室へ戻ってはいないだろうか？ 一定の改革は行っても、休憩時間がきちんと取れているだろうか？ 改革がしっかりと進んでいると胸を張って言える学校は、残念ながらごく一部にとどまるのではないだろうか？ 学校現場の業務は依然として多いのが現状である。そのことを我々はしっかりと認識して「業務削減」をしていこうではないか。

土曜授業の廃止を進めよう

我々の調査によれば、土曜授業実施校とそうでない学校での職員の超過勤務時間は明らかに前者が上まわっている。出勤した職員の振替えも十分に行われていない違法状態。加えてこの土曜授業、受けている生徒の評判もすこぶる悪い。進学希望の生徒は塾などで対策をしており、土曜の授業は却って時間が無駄に取られる、土曜は他にやりたい事があるなど、聞こえてくる声は多い。既に廃止した学校が1校あるが、実施校の校長は他校の様子を窺っていないで廃止を即断すべきである。

部活動は地域移行へ

我々埼玉高教組は、遙か昔から、体育の免許を持つ教員を中心に「体育・スポーツを考える会」を立ち上げ、部活動について議論してきたが、当初から訴

えていたのが部活動の地域移行である。中学校の地域移行が進んでいるが、これは埼玉に限ったことでは無く全国でも見られる。なぜかと言えば、中央で出されている方針に記載あるのが中学校だからである。しかし、様々出されている数値を見れば、高校でも部活動が超過勤務の主要因の一つになっているのは明らかである。中央の動きを見るのではなく、自主的に動き出すべきだろう。

特別支援学校の課題

かつては、連れ合いが普通学校で部活動をやっているの、私はこちらへ来た（つまり部活も生徒指導もない特支は普通に帰宅できるので家庭を担える）、という、いわゆる「でも、しか」の方が特支に多くいたが、この20年ほどで、部活動が多くの特支で始まり、普通学校並みの生徒指導が行われている特支も増え、そして下校時間が遅くなった。普通高校の職員のように空き時間も無いので今では特支の方が大変、という現状。

加えて、進路主事や教務主任程度だった担任外を、自立活動、特別支援教育コーディネーターなどを設け、ここ5、6年は情報（職員のパソコン管理等）や小学部、中学部、高等部の各学部長を担任外とする動きも出てきた。

結果、かつては8～10人程度の児童生徒を4人で担任していたのを今では2人となり（これには他にも原因があるが）、明らかな業務増である。このため、体調不良で休んだり病休となる人が増えている。

埼玉高教組は引続き業務削減、環境改善に取り組んでいくが、もとより我々だけでなし得ることはない。組合加入含め、皆さんの協力を是非、仰ぎたい。

＜追悼文＞「長沼さん、ありがとう」

先頃、埼玉高教組初代書記長の長沼清秀氏が逝去された。氏は、現場を引いてからも本部でオルガナイザーを務めるなど、組合活動に尽力頂いた人である。元同僚からの追悼文を載せたい。以下。

私が長沼さん逝去の知らせを聞いたのは、2月19日のことだったと思う。元桶高同僚の橋本さんからだった。その後、桶高野球部卒業生からも連絡を受け、あたふたしたのを覚えている。

私が最後に長沼さんに会ったのは2年前の年初であった。桶川高校野球部創立50周年の記念式典が大宮の東天紅でおこなわれ、二人ともそれに出席したのである。その年の春頃、長沼さんは体調を崩され、闘病とリハビリの日々を過ごすことになった。そして2月、東京の病院での長沼さんの最期を看取ったのは桶高の教え子でもあった。

長沼さんが組合活動(当時埼玉高教)を始めたのは私とのバーターだった。彼の家で「オノチャン監督やってくれ、俺は組合活動頑張るから」と頼まれ、私

は野球部を、長沼さんは組合活動に力を入れることになる。その後の長沼さんの活躍は皆さんの知るところかもしれない。日の丸・君が代反対、反原発など埼玉高教桶高分会は反主流派の拠点の1つになった。そして組合分裂、長沼さんは初代書記長として埼玉高教組設立に奮闘した。

闘士であった長沼さんは、もう一方で生徒に好かれ、生徒と共に生きた人でもあった。私が記憶する風景は、40年ほど前の夏休み、文化祭にクラス参加する8ミリの映画を生徒と一緒に夢中で撮影する長沼さんの姿である。映画は文化祭で好評だった。このクラスの生徒たちとは家族ぐるみのつきあいもあり、最期を看取るのもこの子たちである。

私自身は長沼さんとは性格も全く違うが、生徒との向き合い方や差別・不正を許さない生き方が好きであったし見本でもあった。斎場で彼を見送ったとき涙はでなかった。小さく「ありがとう」とつぶやいた。

小野田均(桶川高校元同僚)

第2回くじら採用試験対策講座

面接と論文を中心に8月まで月1回実施。勿論、無料、未組の方もOK！

4月26日(土) 1:30~5:00 組合本部ヤギンタビル4F

インクルーシブ教育を実現するには、「大人」が今ある常識を疑い続けられるかに懸かっているのだと、強く思う▼私は初任校が特別支援学校高等部、続いていわゆる全日制普通科高校(以下、高校)に勤務し、今年度から分校で勤務する事になった。教員10年目を迎える今でも新しい学校での勤務の始まりは、不安と期待の入り混じった何とも言えないものである▼分校とは、「障害のある生徒とない生徒がともに学ぶ機会の拡大を図るとともに、特別支援学校の生徒増に伴う環境の整備を進める」という目的をもって、県立高校の施設内に設置される知的障害特別支援学校高等部であると埼玉県は説明している。なるほど完全に分かれたれていた、高校と特別支援学校の壁が取り払われ、〈皆が共に在る〉世界の実現に向けての一步となる、それが分校なのかもしれない▼そのような思いや期待はすぐに崩れ去った。まず1日の時間のサイクルは高校と同じなのに行事以外での関わりはほとんどない。「共



に学ぶ機会の拡大」ではなく、「特別支援学校の生徒増に伴う環境の整備」が主である事は明らかだ▼又特に驚きだった事がある。1日に分校の教職員が揃って高校の職員室の端に列をなして並び挨拶するのである。一方の高校側の教職員はそれを見て拍手するか、食事するか、自分のPCと睨めっこしているかであった。誰が見ても高校が主で分校が従であり、高校の中に「住まわせてもらっている」私たちは、高校側の顔色を窺って調理実習を企画し、グラウンドや体育館で身体を動かすのである▼私たちは同じ公立校の教員である。たまたますでにある高校の中に新しく校舎を建てただけである。「3、4限に音楽室を使わせて頂けないでしょうか」ではない。事前にただ調整すればよいだけだ。私たちは無意識に思考している互いのあり方を見直さなければいけない。それができない大人に教えられた生徒たちが、どうやってインクルーシブ教育を成し遂げられるのだろうか。(Y. T)